

⑥ 職歴……二〇〇六年から六年間、ベイルート・セントジョセフ大学に勤務。二〇〇八年から一一年まで同大学学術交流日本センター副所長。

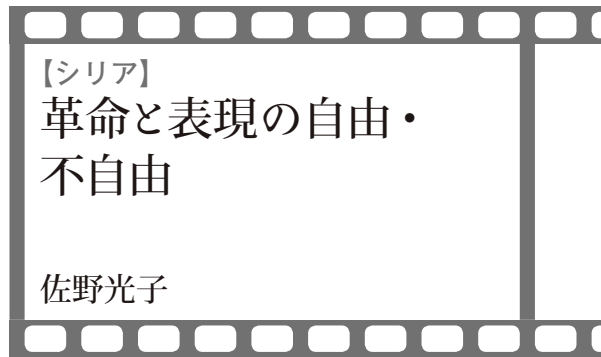
⑦ 現地滞在経験……二〇〇二年九月から〇三年三月までシリアのアレッポを拠点にフィールドワーク（アレッポ大学学術交流日本センター訪問研究員）。二〇〇五年九月から一二月まで、レバノン、エジプト、モロッコ、アラブ首長国連邦にてフィールドワーク（平成一七年度中東次世代フェローシップ、国際交流基金）。

⑧ 研究方法……アラブの映画作品の多くは映像ソフト化されないため、アラブ映画が上映されると聞けば駆けつけて直接スクリーンで観る。一期一会となる作品も多く、この機会を逃したらもう二度と観られないと思ったら航空券を買ってでも行く。とりわけ映画祭は作品と人と情報が一堂に会すので重要。

⑩ 研究上の画期……二〇〇六年七月にイスラエル軍によるベイルート国際空港爆撃から勃発したレバノン戦争に巻き込まれたこと。以来、研究対象地域に対して肝が据わったように思う。

⑪ 推薦図書……García Canclini, Néstor (1995), *Hybrid Cultures. Strategies for Entering and Leaving Modernity*, Christopher L. Chiappari, University of Minnesota Press.

⑫ 推薦する映画作品……『パラタイス・ナウ』（ハニ・アブ・アサド監督、二〇〇五年、フランス、ドイツ、オランダ、パレスチナ）。



二〇一一年初頭にいわゆる「アラブの春」の流れに乗って始まったシリア反政府運動はやがて政権側との軍事衝突に発展し、今や内戦状態とまで呼ばれる事態となった。騒乱は一向に収まる気配を見せず、外国人戦闘員の流入などもあり戦禍は日々深刻化している。穏やかで平和な日常が悠然と続くシリアでの日々を短い間とはいえ経験した者として、さらには長期居住していたレバノンが政情不安に陥るたびに隣国シリアの泰然とした様を羨望の眼差しで眺めていた者として、かつてのレバノンとシリアとが入れ替

わってしまったかのような現在の状況を、今は信じがたい
思いで見守るばかりである。

ところである時期から、それはシリア政府軍からの離反
兵の増加や政府高官・外交官の相次ぐ亡命が報じられるよ
うになった頃のことであるが、二〇年以上も前に撮られた
ある一本のシリア映画がしきりに脳裏に浮かぶようになって
た。戦争ものではない。とある農民一家の崩壊を描き上げ
た悲喜劇だ。『ジャツカルの夜』というその作品は、シリ
ア随一の多産監督であるアブドゥルラティーフ・アブドゥ
ルハミード監督の初監督作品である。

喜劇と悲劇

物語は一九六七年の第三次中東戦争を背景に展開する。

地中海沿岸の都市ラタキア近郊の村で農業を営むアブーカ
マール一家。朝から家族揃って農作業に励み、唯一の娯楽
はラジオから流れるアラブ歌謡やニュースを聞くだけとい
う素朴で慎ましい生活を送っている。軍人上りのアブー
カマールは、家庭内においては小王国に君臨する絶対君主
そのものであり、一切の口応えを許さない。何か失敗すれ
ば妻や子どもたちを怒鳴りつけたりもする。それでも日々
の生活はつつがなく流れ、傍から見る限り平和で幸せな一
家である。そんなアブーカマールにも一つだけ弱点があっ
た。夜な夜な響き渡るジャツカルの遠吠えである。この遠

吠えがやまない限り彼は寝つくことができない。遠吠えを
止められるのは妻の口笛だけだ。彼は毎晩のように妻に口
笛を吹かせてようやく眠りにつくのだった（写真）。

しかしそんな平穏な生活はすでに綻び始めていた。ある
日、街で勉強に励んでいるはずの長男の下宿先を訪れたア
ブーカマールは驚愕する。部屋には女性用ランジェリーが
散乱し、壁には女性のヌード写真が何枚も貼られていた。
長男は勉強などそっちのけで放蕩生活を送っていたのだっ
た。茫然自失のアブーカマールに追い打ちをかけるよう

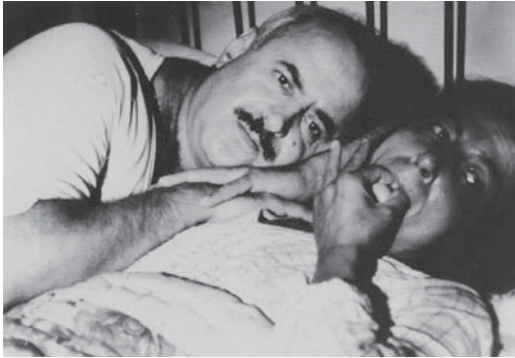


写真 『ジャツカルの夜』より

に、自宅の玄関先に置かれたラジオはトマト相場の大暴落を告げる。激昂したアブーカマールは収穫したばかりのトマトを踏み潰し荒れ狂う。さらに怒りに任せ、謝罪にやってきた長男を激しくなじって殴り倒し、二人の断絶は決定的なものとなる。

次男のタラールは家庭持ちの女性と不倫関係に陥り、それを知ったアブーカマールは彼を頭だけ出して地中に埋め、髪をバリカンで刈り取るという狂気じみた仕置きをする。タラールにはその後すぐに招集令状が届き、そのまま駐屯先で戦死する。唯一の娘タラールも密かに関係を続けていた近所の男性と突如駆け落ちしてしまう。アブーカマールの心の拠りどころであった妻は心労から急逝し、幼い末息子は父と家を捨て街へ出て行ってしまう。アブーカマールはひとり家にとり残され、夜の帳の中でまんじりともせずジャツカルの遠吠えに怯え続ける。

サデイスティックなまでに悲劇的な結末であるが、こういった破滅的な終わり方自体はシリア映画においてはさほど珍しくはない。シリア人が本質的に悲観主義者なのかどうかは安易に判断することはできないが、少なくとも映画を見る限りは、唐突に観客を突き放すような救いようなないエンディングは枚挙に暇がない。ただし、アブドゥルハミード監督の求めるものは完全な喜劇でも完全な悲劇でもなく、常に喜劇の中に悲劇性を、悲劇の中に喜劇性を投入

することによって彼独自の世界観を紡いでいる。したがって本作でも、結末の悲惨さとは相容れないような剽軽さが、とりわけ前半部には随所に織り込まれているのである。

独裁政権へのやわらかな批判

教科書的に分析するならば、『ジャツカルの夜』においてアブーカマールが夜な夜な怯えるジャツカルの遠吠えが象徴するものはイスラエルの脅威である。さらに、本作が一九八九年製作であることを考慮すれば、一九七五年から九〇年まで続いたレバノン内戦、一九八〇年に勃発したイラン・イラク戦争、シリア国境近くで展開するトルコ軍とクルド人との戦闘、加えて本作発表の翌年に始まることになる湾岸戦争など、シリアを取り巻く地政学的な脅威への不安感の表れとも拡大解釈できるであろう。そして、一家の独裁者たるアブーカマールはまさに当時のハーフエズ・アル・アサド大統領を象徴するものである。アブーカマールが元軍人であるという設定、さらに舞台がアサドファミリーのお膝元であるラタキアであるということがそれを暗示していると言えるだろう。

外部からの脅威に気を取られていた独裁者は、自らの国内における破綻の兆候に目を向けることなく、その結果、圧政への不信任感から一人また一人と支持者を失い、最

後は一人孤独に恐怖に打ち震えることになる。これは独裁政権へ向けた警鐘とも思える寓話である。実際、七〇年代後半以降のシリアは内政面でもイスラム原理主義の台頭という問題を抱えており、それに対する弾圧が、一九八二年にシリア第五の都市ハマードで発生した二万人を超える大虐殺という形で頂点に達した。このように、『ジャッカル』の夜』は厳格な家父長制の敗北という物語の裏に独裁政権への批判を包含した多義的な映画なのである。

翻って、現在のバッシュヤール・アル・アサド政権時代の文脈で本作を観なおしてみるとまた違った読み方ができるだろう。二年前、彼らが耳にしたジャッカルの鳴き声はイスラエルの脅威などではあるまい。それはチュニジア、エジプトそしてイエメンと次々に連鎖していった「アラブの春」を支持する民衆の叫びではなかったか。そして一九六〇年代に戦況や青果物価格を人々に伝えてくれたのはラジオだったが、現在は衛星テレビのアルジャジーラやアラビーヤが、さらには携帯電話のショートメッセージやツイッター、フェイスブックといった双方向性メディアがその役割を果たしている。シリアでの反政府運動が始まった当初は政権を支持する声も大きく、国民からの信頼はまだ失われていなかったように思われる。しかし、アブーカマールが息子たちにしたような過剰な弾圧が行われる度に、瞬く間にその情報はメディアを介して人々に共有さ

れ、急速に民心は離れていく。やがて軍や政権内部からの離脱が相次ぎ、アサド政権が国際社会からも孤立していく様は、まさに暗闇に一人取り残されるアブーカマールの姿と重なってしまうのである。

それでは、このような反体制的メッセージを孕んだ作品を国家予算で撮り上げたアブドゥルハミード監督とはどのような人物なのか。一九五四年ホムスに生を受け、モスクワの国立映画大学（VGIK）で映画を学んだ彼は、意外に思われるかもしれないがアサド政権の中核をなすアラウィー派の出身である。シリアの映画製作をほぼ独占してきた文化省傘下の国立映画総局からこれまで一〇作品を世に送り出してきたが、他の監督は多くても二、三本であることを考えると、一〇本という本数が極めて異例であることがわかるだろう。その特別な計らいにはやはり彼の出自が影響しているのかもしれないが、実際、シリアの映画で採算がとれているのは彼の作品だけだという話も聞く。

彼はしばしば「シリアの人氣監督」として紹介されるが、笑劇の中に織り込んだ悲劇性やアイロニーがシリア人観客に好まれていくという意見もあれば、先に述べたような体制批判ともとれるコンテキストが作中に巧みに仕掛けられているところを受けているという指摘もある。例えば彼の作品には『ジャッカルの夜』と同様にアラウィー派の本拠地ともいえるラタキアの村を舞台にしたものが多

い。そこで使用されるアラビア語のラクキア方言が一般のシリア人観客を面白がらせているらしい。ラクキア出身の政府高官が話す癖のあるアラビア語を登場人物に話させることによって、普段はからかうことなど許されないお偉方を連想させて観客を笑わせているのだという。いずれにしても、体制を揶揄しようとする姿勢がアブドゥルハミード監督の魅力の一つなのだろう。

革命と表現の自由・不自由

本稿を執筆中の二〇一二年一月、第三五回カイロ国際映画祭に出品中のアブドゥルハミード監督一〇作目となる最新作『恋人』が、映画祭開催直前に突然コンペ部門を失格になったというニュースが飛び込んできた。監督のアサド政権支持発言がその理由らしいが、これと似たようなことがエジプトの喜劇王アードル・イマームの身にも起きている。革命中にイマームがムバラク政権擁護発言をしたことが問題視され、ムバラク政権崩壊後しばらくの間、映画・芸能界から干されてしまったのだ。そういえば、アブドゥルハミード監督の新作が発表される度に必ず出品されていたバイ国際映画祭にも今回『恋人』はエントリーされていない。その一方で、反体制的な立場から映画製作を続けてきたインディペンデント系の監督たちの作品は軒並み上映機会が増えているようだ。これまで冷や飯を食らわ

されてきた若手監督などは是非このチャンスを生かしてほしいところである。

しかしながら、アブドゥルハミード監督もまた、婉曲なやり方とはいえ、できる範囲で身内とも言える体制への批判的なまなざしを作品の中に縫い込めてきた。監督がアサド政権を支持しているというだけで、あるいは作品がシリア国立映画総局の製作というだけで、今後上映機会を失っていくのだとしたらあまりにも惜しいことである。映画のみならず、現在のシリア紛争をめぐる言説がすべて親体制・反体制というあまりに単純な二分法に収斂していくことに違和感を覚えてならない。

映画リスト

『恋人』……① *الحبيب*、② アブドゥルラティーフ・アブドゥルハミード、③ 二〇一二年、④ シリア、⑤ アラビア語、⑥ 未公開。

『ジャッカル之夜』……① *ليلة جاكوار*、② アブドゥルラティーフ・アブドゥルハミード、③ 一九八九年、④ シリア、⑤ アラビア語、⑥ 中近東映画祭（一九九二）。

著者紹介

四二七―四二八頁に掲載。